令和６年度　研究報告書

派遣者番号	Ｒ６Ｋ０８	氏　名	倉林　宏樹
研究主題 ー副主題ー	児童主体の学びを実現する多様性に着目した「個別最適な学び」の追究 ー社会科教育における地域学習の実践を通してー		
派遣先大学	東京学芸大学 教職大学院	指導担当者	大澤　克美
所属	小金井市立小金井第三小学校	所属長	増田　亮

キーワード：個別最適な学び　多様性　社会科教育　地域学習

要旨：　現在の社会は情報化の進展、少子高齢化社会、未知の感染症の流行など人々の生活を取り巻く状況が目まぐるしく変化し、「予測困難な時代」である。また、教育現場では不登校児童の増加、いじめ問題、学習についていけない児童の増加など、様々な課題がある中で、国は「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体化を示し、これからの未来を担う児童・生徒の育成を掲げている。今まで当たり前に行われてきた一斉授業を見直し、児童・生徒一人一人の個性や人格を大切にする教育を推進している。しかしながら、現場の教員がどこまで「個別最適な学び」について具体的なイメージをもち、教育活動を進めているのか疑問が残る。本研究では、社会科の地域学習の授業実践を通して「個別最適な学び」についての可能性や課題を明らかにする。また、児童の違いを多様性としてとらえ、多様性に応じた教員の働きかけについても考える。

児童主体の学びを実現する多様性に着目した「個別最適な学び」の追究
－社会科教育における地域学習の実践を通して－

小金井市立小金井第三小学校 倉林　宏樹

１　研究の背景

全ての児童が自分の良さを自覚し、学ぶことの意義や目的を見出し、個人として成長することが教員にとっての大きな願いである。しかしながら児童が自分の良さや、認知特性を理解し、主体的に学ぶことはできていない現状がある。現場の実態では、不登校問題やいじめ問題、学習についていけない児童の増加など様々な教育課題が見られ、より一層「個人」を大切にする教育が求められている。また、学校現場では、「個別最適な学び」についての理解を深める研修や講演が行われているが、どのように授業実践を行っていけばよいのか現場の教員からは疑問の声が挙がる。

２　研究の目的

以上の背景を考えると教員の授業に対する固定観念や考え方を見直し、児童の多様性を理解しながら具体的な授業の構成案を考えることが必要である。本研究の目的は、どのように授業を実践すれば、「個別最適な学び」の実践を公立学校で行うことができるのかを明らかにすることである。

３　研究の方法

（１）　単元構成について

児童一人一人に適した授業を行うためには、従来の一斉授業を脱却する授業構成が必要であり、児童の実態、多様性に応じた授業を構成することが必要である。個別学習の研究については多くの先行研究がある。竹林康司（1994）は個別学習の授業実践を考察する上で学習指導要領に示されている単元の中で身に付けるべき基本的な内容と個別学習方法の類型について示している。その中での個別学習方法については、①一律的指導型における個別学習 ②発展的指導型における個別学習 ③個別的指導型における個別学習の大きく三つを示している。①の一律的指導型には二つの指導方法があり、（ア）一斉指導型 （イ）個別指導型がある。多くの教育現場で行われているのは ①の（ア）「一律的一斉指導型」である。この指導方法は教師主導の学習スタイルである。その中でも、個々の興味・関心をもとに学習課題を設定して教師は助言者として支援する授業が ①の（イ）「一律的個別指導型」である。竹林の示す類型から考えると、「一律的一斉指導型」を脱却し、「一律的個別指導型」を発展させ、日々の授業を組み替える必要がある。

（２）　児童の多様性について

「個別最適な学び」は学習者を主体として示された概念であり、学習者によって多様性があることに着目することも必要になる。加藤幸次（2022）は五つの個人差を確認する必要があると述べる。①学力（到達度）②学習時間差③学習スタイル（適正）④興味・関心差⑤生活経験差のうち、①、②、③は「指導の個別化」に関わる内容であり、④、⑤は「学習の個性化」に関する内容であるとする。加藤が示す「個人差」については確かに児童に存在すると考えられるが、それだけにとどまるかどうかは疑問がある。奈須正裕（1993）によると教育心理学における ATI 研究では、ある事柄を教える際に、手順や教授法、課題内容による学習効果に加え、学習者の能力や経験、性格などといった特性の違いによっても学習効果に違いが生じると考えられている。これは教育心理学において学習者の適性に

応じた学習法の理論的基礎となるものであると述べている。本研究では、児童の違いを個人差として分類するのではなく、特性の大まかな違いとして多様性を考える。以上のことから、事前のアンケートや担任の聞き取りなどを通して児童の多様性を把握すること、その実態をもとに単元構成を工夫すること、教員が児童の多様性に対する適切な働きかけをすることを手立てとし、そのことが有効であるか検証する。

（３） 授業実践

本研究では、地域教材を活用し、第４学年と第５学年で社会科の実証授業を行った。小学生という発達段階において、直接体験による学びは児童の学習意欲の向上に良い影響がある。地域教材を扱うことで、「個別最適な学び」で目指す児童主体の学習がさらに活性化される。なお、本研究では児童の多様性の把握のために「授業前のアンケート調査」「担任への個別の聞き取り」「授業中の実態把握」「授業後の個別質問調査」を行った。

資料　第５学年で行った実証授業の単元指導計画概要「自動車をつくる工業」

時	本時の目標	主な学習活動
1	自動車とわたしたちの生活との結びつきに関心をもち、消費者によって様々な需要があることを理解する。	・世界では多くの日本車が走っていることを調べ、日本の自動車産業が世界でも人気が高いことや、日本の工業生産を支えていることをつかむ。
2	日本の自動車生産の様子や変化に着目し、学習問題を考える。	・日本の自動車が人気な理由と自動車工場での効率的な作業の様子を調べ、学習問題を考える。
3	学習問題の解決に向けて予想を話し合い、学習計画を立てる。	・学習問題に対する予想を考え、学習計画を立てる。児童自ら問いを作成し、調べ学習の計画を立てる。※児童自らが学習計画を作成できるようにする。
4・5・6	自動車の作り方、自動車工場同士の関係、自動車の届けられ方について調べることができる。	・学習問題・学習計画をもとに各自の興味・関心を中心に自動車工業について調べる。 ※児童が自由に調べ方を選択できる単元設定にする。
7	自動車を開発する様子について調べ、消費者の需要や社会の変化に合わせて自動車を開発していることを理解する。	・自動車生産が様々な分野の開発をしていることを調べ、社会の変化に応じて工業製品が作られていることをつかむ。
8	自動車工場（部品工場）の見学を通して、関連工場についての学習を深めることができる。	・社会科見学を通して体にハンディキャップのある方向けの部品作りについての理解を深める。※児童が主体的に学べる地域教材を活用する。
9	社会科見学で学んだことをもとに、自動車工場で働く人の思いについて考える。	・社会科見学での学びを振り返り、見学先の社長からの言葉を聞き、作り手の思いや考えに触れる。※児童一人一人が思いを表現できるようにする。
10	学習したことを整理し、学習問題についての自分の考えをまとめる。	・学習を通して、日本の自動車工業の未来や現在の日本の自動車工業の課題などについて自分なりの考えを記入する。

４　研究の成果と課題

本研究の成果として、児童が自らの興味・関心に応じて「学習方法、学ぶ資料、問いの言葉、学習順序」を選択できる単元構成にすることで一定の児童の主体性を高めることができた。決められたことを押し付けるような授業展開ではなく、「個別最適な学び」を実現させるために、児童自身が選択できるゆとりを単元の中で設定することは有効であった。課題としては、全ての児童の多様性に対応することができたわけではないということである。個別質問調査からもわかるように、従来の教員主導の一斉授業の方が学ぶ意欲が高まると答えた児童も一定数おり、児童の多様性に応えることは難しかった。教員が児童の多様性に応じて、調べ学習の時間に一斉指導をすることも必要であるし、実態に応じて学習環境、学習方法、資料の提示方法を変更しながら授業を進めていくことが必要であった。

５　成果の活用方法

児童の多様性を考える上で、学年による発達段階、各学級による学習環境、児童の家庭環境、児童同士の人間関係など多くの要素が影響していることが分かった。また、教員の指導する教科や学習内容も様々な分野があり、児童の多様性に着目すればするほど「個別最適な学び」を実現することは難しい。そのようなことを踏まえ、今後は自らが中心となり、学校全体として一貫した共通理解のもと「個別最適な学び」を実現させるために学年間の実態に応じたカリキュラムを編成し、多様性に応じた指導をしていく。

６　主な参考文献

・奈須正裕, 2021,『個別最適な学びと協働的な学び』東洋館出版
・加藤幸次, 1985,『個別化教育入門』教育開発研究所
・横田富信, 2024,『子どもの自己調整スキルを磨く』東洋館出版社
・宗實直樹, 2023,『社会科　個別最適な学び「授業デザイン」理論編』明治図書出版